

# 釣行考

新しい仲間も増えた。古参の御大も益々盛んだ。嬉しい限りである。古参やベテランの釣法を尊重しつつも、新たな釣法を模索する。将棋の世界を真似て「新手一生」とすることにより釣の幅が広がる。釣には定理はないし、その時々で最高の釣果を得た釣法が正解となる。それで数かと言われれば数でもなく、大きさとと言われれば大きさでもない、究極の自己満足の世界なのかもしれない。「これだ！」と自分の思い通りになった時の快感を追求める行為と表現するに至るのではないか。仮にその時、最高の満足感を味わったとしても次の釣行時、同じ釣場であっても、同じ水面・水面下の条件は絶対あり得ないし同じ気象条件もあり得ない。まして正確な釣法もそれを実行する者が機械ではなく人間である限り一定となり得ない。つまり、満足を得られる何かを追求めることになる。

将棋は $9 \times 9 = 81$ の升に自分の駒を一手一手相手と交互に打合う競技である。仮に自分の駒が全て盤上にあつたとすると $81 - 20 = 61$ が次に打つべき場所の候補となる。同じ場所に自分の駒を打つことは何も打たないと同義となる。したがって、何も駒を取られていない条件に於いては、実際そうならないが10手先（先後含め）は61の10乗= $71$ 京3, 342兆・・・手となる。単純に確率計算的に求めた数字なので、実際禁じ手や非常識な手を省くと、半値人掛け二割引きとなり得るのであろう。（もっと多いのか、少ないのかは不明）プロ公式戦の平均投了手数は概ね120手と言われている。とすると61?を120乗してから割引いて考えるのが筋なのか。何れにしても、天文学的な道筋があることは否定できない。これからもそれらが栄枯盛衰するのかと思うと楽しいし、それらを開拓してくれるであろう将来ある人々達の活躍を大いに期待したいものだ。

話が将棋に傾いてしまった。元の「釣行考」に戻す。将棋でさえ様々な手があるのであるから、制約条件がほぼない釣には、この手に限るはあり得ない。が、経験に基づく釣れる確率を上げる術はある。ただし、いろいろやってこれしかないであろうは認めるが、これしかやってなくてこれしかない。と結論付ける法はないし、あり得ない。過去から学ぶべき術は数多あるが、それを闇雲に踏襲しても進歩はない。釣り場の環境は過去からも昨日からも刻々と変化する。道具も進化している。しかも、ゲストなる目的外の魚種も本意ながら釣れてしまう環境変化の中、それを避ける術も身に付けなければならない。

したがって、満足を得るためには、模索し続け、実践し続けるしか道はないし、それを継続するに必要な条件である機会もさらに必要となる。これがまた難儀なところである。最後に「釣って殺生、食べて往生」は未永く自分の銘として釣魂に刻んでおきたい。食べないものは釣らない。あくまで個人的な意見なので、そう思わない方々には悪しからず。